

2017年度

文部科学省委託事業  
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称:AG5)

エー  
**A** ジー  
**G** ファイブ  
**5** **だより集**



公益財団法人 海外子女教育振興財団

## 本冊子について

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そしてこのたび弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施する運びとなりました。

その成果発信の一環として弊財団で発行している月刊『海外子女教育』で2017年度は「日本人学校・補習授業校タマテバコ」という名称で連載し、2018年度からは「AG5だより」と名称を変え現在まで連載を続けております。連載では各テーマの研究の進捗状況や取り組みを紹介しています。本冊子では2017年度のものをまとめました。

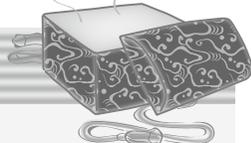
弊財団では引き続き、「日本人学校におけるグローバル能力育成のためのプログラム開発」や「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」、「南米日本人コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発」などに向けて本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2021年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団  
AG5事務局

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## 新しいプロジェクト(AG5)が始動します!

エージーファイブ

AG5運営指導委員会委員長・目白大学長 佐藤郡衛

このたび、G-ONE (Global Overseas New Education) プロジェクトが大きく発展することになりました。本誌7月号のトピックスでお知らせしたように、海外子女教育振興財団は、文科科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」を受託することになったのです。その概要をお知らせします。

### AG5プロジェクトのスタート

新事業のベースになったのが、G-ONEプロジェクトです。この新事業は、「在外教育施設特有の課題の解消」及び「在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけ、より高度なグローバル人材育成を見据えた先進的プログラムの開発・推進」を図ることを目的にしたものです(詳細は本誌二〇一七年五月号をご参照ください)。

私たちは、これをより具体化し、第一に「海外に在住する子どもたちに高度なグローバル人材としての基礎力を育成すること」、第二に「国際結婚家庭や永住者の子ども増加に伴う日本語能力向上のための教育を提供すること」、そして第三に「在外教育施設が日本文化の発信の拠点としての役割を果たすこと」を課題にしました。そこでこのプロジェクトを、高度グローバル人材育成事業の頭文字と五つのプロジェクトを走らせることから「AG5 (Advanced Global Five) エージーファイブ」プロジェクトと呼ぶことにしました。

### 取り組みの基本的な姿勢

この事業の主要な目的は、在外教育施設を高度グローバル人材育成の

拠点にするという点にあります。

日本人学校や補習授業校をいくつか選び、その学校の課題を解決するとともに、先導的な実践を行うことでこれからの教育の方向性を示し、そしてそれを他の学校に普及させていくことがねらいです。これまでと異なるのは、財政的な支援も行うことが可能になったことです。

AG5プロジェクトの基本姿勢は、G-ONEプロジェクトと変わりません。本誌二〇一六年六月号にG-ONEプロジェクトの三つのタスクを掲げました。

一つ目は「在外教育施設の実態把握のための調査研究を行うこと」、実態をきちんととらえて、その学校に合った支援を考えるためです。二つ目は「アクションリサーチ型」の支援、新しい取り組みや実践を行うおうとしている学校に直接支援を行い、いっしょに取り組みながら課題を解決していくことです。そして三つ目は「広報と普及活動」、先導的な実践を行っている学校とその成果を広く知っていただく活動です。AG5プロジェクトでもこの基本的な姿勢を貫きたいと考えています。

実際に日本人学校や補習授業校に出向き、教職員のみならず、保護者や運営委員会の方々の意見交換、

現地での研修なども行っていきます。私たちは評論家や解説者でなく、日本人学校、補習授業校の支援者として自らを位置づけています。

### 五つのプロジェクト

このプロジェクトでは、次の五つの取り組みを行っていきます。

- ① 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発
- ② 日本人学校における日本語教育プログラム開発
- ③ 日本人学校における教員(学校採用教員)の指導力向上のためのプログラム開発
- ④ 補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発
- ⑤ 日本文化発信の拠点形成プログラム開発

各プロジェクトとも選定した在外教育施設を拠点校にして、その学校を支援していきます。そのために、日本国内でプロジェクトチームを立ち上げました。メンバーは、教科教育、国際教育、日本語教育、情報教育などを専門にし、実際に日本の教育界で指導的な立場に立つ方々にお願いしました。メンバーが直接、各学校に出向き、教職員、運営委員会などの方々と話し合いの場を持ち、

相談にのったり、指導・助言を行ったりしていきます。

逆に、日本人学校や補習授業校の先生方が日本国内で学校を参観したり、研究会などに参加したりするよい機会もつくっていきます。国内の学校にも研究協力校という位置づけで、海外からの研修を受け入れたり相談にのってもらったりするような体制をつくっていきます。TV会議や情報機器なども活用して負担がかからないようにもしていくつもりです。以下、各プロジェクトの概要をお知らせします。

## ② 日本人学校における日本語教育プログラム開発

日本人学校では、国際結婚家庭の子どもや長期滞在者の子どもが増加傾向にあり、日本語力が十分でない子どもたちが出てきています。このため、日本語指導という課題に直面していますが、そのための十分な指導体制をとることができないのが現状です。日本人学校の負担を軽減するために、日本語教育のプログラム開発を行い、それを提供するとともに、指導する教員の研修等を行っていきます。

## ① 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発

本誌でも紹介してきた香港日本人学校小学部香港校が研究提携校です。同校では二〇一六年からグローバルクラスを設置していますが、小学六年生用のカリキュラム開発の支援と、小学四〜六年生までのカリキュラムの一貫性と体系的を図り、他の日本人学校でも実施可能なモデルカリキュラムの提案を行っています。

さらに、一般のクラスの小学部の英語力の向上を図るためにICT教材等を活用した取り組みも想定しています。

小学部から高等部まである上海日本人学校にお願いしています。

具体的には、主に着任後一年目の教員を対象にした初任者研修プログラムの開発、そして二〜三年目の教員を対象にしたスキルアップ研修プログラムの開発です。どのようなプログラムが必要か、具体的実施体制など現地の要望と実情を踏まえて取り組んでいきたいと思っています。

## ④ 補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発

これはG・ONEプロジェクトの延長上にあり、まずは補習授業校の実態調査を行い、現状の正確な把握に努めます。ただ、その中でも子どもの日本語力を育成することが最も重要な課題です。子どもたちの日本語力を向上させるためにどのようなカリキュラムが効果的かを検討し、プログラムの開発を行うことにしています。また、ICT教材などの活用方法も検討し、現地で指導可能なプログラムを開発し提供したいと思っています。

## ③ 日本人学校における教員（学校採用教員）の指導力向上のためのプログラム開発

日本人学校には、政府から派遣されている教員の他に、学校独自で採用する教員がいます。この学校採用教員には、大学新卒者や他の職業からの転職者も多く、教員として更なる資質、指導力の向上が期待されているところですが、研究提携校として、

提携校を想定しています。一校は学校図書館を地域に開放し、地域住民、日本人学校の教員、保護者等が気軽に交流し、さまざまな人たちの居場所になるような「知的交流拠点」を目指している西大和学園カリフォルニア校です。

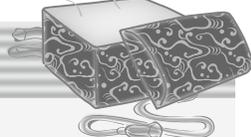
もう一校はパラグアイのアスンシオン日本人学校です。パラグアイは日系移民八十周年の節目を迎え、アスンシオン日本人学校では日系移民のみならず現地社会との連携を図っています。これまでの取り組みに加えて、日本文化理解や日本語教育のプログラムなど活用できるリソースを収集し、データベース化するなどして、日本人学校を通してそれらの情報を現地社会に提供できるように体制を構築したいと考えています。

以上が概要ですが、できるだけ早く各学校を訪問し、話し合いながら具体の開発を行っていきます。そして、各研究提携校での成果を他の学校に普及していきたいと考えています。各学校と協働して着実に成果を蓄積していきます。ぜひ、新しい試みに注目してください。

（おことわり）文中に記した学校とは七月以降、正式に詳細を協議していく予定です。

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## 台北・台中日本人学校を訪問して

東京学芸大学国際教育センター准教授 見世千賀子

AG5プロジェクトで取り組む5つのテーマのうち、「日本人学校における日本語教育プログラムの開発」について、研究提携校の台北と台中の日本人学校を、本プロジェクトのメンバーで子供の日本語教育を専門にする東京学芸大学国際教育センター菅原雅枝准教授と共に6月末に訪問した際の様子を紹介します。

### 学校環境と入学要件

台北日本人学校（重山史朗校長）は児童生徒数七三九名の大規模校です。まず驚いたのは、台北は治安がよく、学校へ徒歩や地下鉄等の公共交通機関を利用して通学する子供が多いことです。小学校六年生までは保護者の付き添いが必要ですが、中学生になるとひとりでの通学も可能となっています。台中日本人学校松尾功子校長は児童生徒数一三三名の各学年単学級の中規模校です。街の中心部から少し離れたところにあるため、子供たちはスクールバスか保護者の送迎で通学します。

両校とも入学要件は台湾以外の国籍を持つていることです。台湾籍のみの子供は、現地の法律により入学できません。しかし、なかには両親とも台湾籍でも、子供はアメリカやアフリカ諸国等の第三国の国籍を持ち、日本人学校に入学するケースもあります。台湾の保護者が子供を日本人学校で学ばせたい理由には、日本のしつけや生活習慣、多様性に富んだ学習内容といった点への評価と期待があるそうです。

### 日本語指導が必要な子供の増加

台北では昨年八月より、原則とし

て入学希望者は日本語力を問わず編入学可能となっています。その結果、現在特に小学校一、二年生に、日本語指導が必要な子供が多く在籍しています。

台中では、国際結婚家庭の子供と両親ともに台湾籍家庭の子供で、小一〜中三まで各学年それぞれ全体の四〜五割程度を占めています。入学の際に日本語力を問わない代わりに、保護者に対して、日本語学習への協力をお願いしています。台北でも同様ですが、日本語力に問題のない子供もいる一方、他方において母親が台湾籍の場合を中心に家庭での対応が難しいケースも多く、実際には日本語指導は学校の課題となっています。いずれも、家庭で日常的に使用される言語は、中国語、日本語、日本語と中国語の両方、またその他の言語等と家庭によってさまざまです。

### 台北日本人学校の日本語指導体制

一年生は、年齢上の課題でもありますが、先生方は「指示が通りなく、ちょっとしたけんかも少なくない」と感じています。あるクラスでは、「ふわふわ言葉」（例：すごい、かしてあげる）と「ちくちく言葉」（例：かさがない、ばか）を紙に書いて掲示し、他者の思いをくみ取り、友達とよい関



台北日本人学校 日本語補習の様子

係が築ける言葉の指導をしています。台北では一、二年生の希望者を対象に、週一回放課後を利用して三十分間の日本語補習授業が行われています。両学年とも四学級四名の担任がいることから、三段階（上中下）のレベル別に四グループを作り、学年担任が指導をしています。一年生は、コミュニケーション（挨拶等）中心、読むこと（音読）中心、書くこと中心の三つのグループに分けられます。ふだんの学級での様子から、先生方が子供の課題を判断し、所属グループを決めています。一年生で日本語補習を受けている児童は二十四人、国際家庭でも補習の必要がない子や、先生が必要を感じていても保護者が希望せず補習を受けていない子供もいます。参観した三つの

補習授業のうち、挨拶中心は六名を対象に「おはよう」や「さようなら」等、長音と文字の表記を学習。音読

中心は二名を対象に国語の教科書で現在学習中の単元の文章を指さしながら、読みの指導が行われていました。最も日本語力の弱いグループでは、二名を対象に十色で塗られた十個の円をプロジェクトで黒板に投影し、先生が「赤」というと、子供は赤色の円をタッチするというゲームを行い、楽しく活動させながら色と呼び方を確認し、その後ワークシートで書く活動を行っていました。

二年生は、約二十名がレベル別に四グループに分かれます。二年生は平成二十二年頃に作成された日本語補習年間計画とワークシートを使用し、全グループが同じ内容で学習を行います。前期十三回、後期十八回で構成され、計画には、それぞれの回の題材名と覚える言葉等が示されており、たとえば第一回は「自己紹介」、覚える言葉は「くです。よろしくお願ひします。」となっています。参観した六月二十八日は「濁点のつく五十音」について、「濁点がつく言葉、特別な言葉探し」についてワークシートを使用して濁点がつく五十音を確認したあと、思いつく濁点がつく言葉を書き出したり、「大

きい十こえい何か? (大ごえ)」といった特別な言葉を確認したりしていました。

### 台中日本人学校の日本語指導体制

台中での日本語指導は、小一〜六年生まで、保護者から希望のある子供を対象に、通常の時間割の中で、週一回四十五分の中国語学習の時間の裏で行っています。全体の時間割や放課後の下校時間等の関係で、現在はそのような対応になっています。国際家庭と台湾家庭の保護者は、四月の段階で中国語学習か日本語学習かを選択することになっています。日本語を選択している子供は各学年に三〜七名います。中学の国語科教員一名が全学年を担当し、国語教科書、ドリル、公文教材、辞書等を利用して、音読、文法、文の作成、語彙を増やす等の指導が、国語の学習

進度に合わせて補習的に行われています。参観した六年生四名の授業では、俳句づくりを「入道雲」をお題に、言葉の意味を辞書で確認しながら創作し、お互いの句からどんな情景が浮かぶか、和やかに意見交換を行っていました。

### 先生方のニーズと今後の方向性

以上のように、両校で取り出しの日本語指導が行われていることは、極めて意義のあることです。在籍クラスでの授業の中では個別に十分に対応できない、発音、文字・表記、語彙の確認、文型・文章の指導等を週一回でも補習的に行うことは、子供の日本語の力を伸ばすうえで有効です。

いずれの学校においても先生方からは、「手探りでやっているこのやり方ではほんとうによいのか」「グループの中での個人差にどのように対応すればよいのか」「日本語指導をする際の見通しを知りたい」「指導法を増やしたい」等の疑問や要望をお聞きしました。こうした疑問や要望に対して、プロジェクトでは、次のような課題を検討していきたいと思えます。

・ 文部科学省(東京外国語大学)で開発された「対話型アセスメント

(DLI)等の方法を用いた日本語力の実態把握

・ 個別の指導計画の作成

・ 全体計画の作成  
取り出しでの指導については、たとえば台北で使用されているものや子どもの実態や日本語指導の視点から見直し、学校や子供に応じた計画を検討できればと思います。

また、ご紹介したとおり台北・台中では言語的文化的に多様な子供たちに対し、在籍クラスの授業でも日本語指導の視点や背景への配慮が日常的に必要となります。すでに、先生方はタブレットや具体物等を活用して興味関心や理解を促したり、授業中さりげなく声かけをして活動を促したりするなど工夫されています。それを基礎に、在籍学校での日本語指導の視点を取り入れた授業を検討できればと思います。国際結婚家庭の子供や現地の子供たちは、将来日本との懸け橋になってくれる重要な宝です。文部科学省で開発されたJSLカリキュラムの視点や国内の実践を参照して、日本人学校の負担を軽減し役立つ日本語教育プログラムを協働で開発し提案していきたいと考えています。

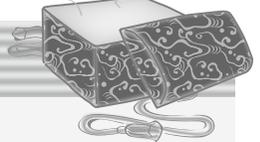
\* JSLカリキュラム(第二言語としての日本語)  
# JSL: Japanese as a Second Language)



台中日本人学校 日本語学習の様子

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## ダラス補習授業校の挑戦への支援

AG5運営指導委員会委員長 日白大学長 佐藤郡衛

文部科学省からの受託事業「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称AG5)プロジェクトの打ち合わせのため、ダラス補習授業校を訪問しました。当地域は、日本の大手自動車メーカーによる北米の本社機能移転によりいま大きく変わろうとしています。補習授業校も例外ではありません。今回は、このダラス補習授業校の取り組みと今後の支援策について紹介します。



### 多様化する子どもへの対応

いまダラスは活況を呈しています。大手自動車メーカーの北米の本社がカリフォルニア州からここテキサス州ブレインノ市に移転したためです。関連する日系の企業も移転してきますし、駐在員とその家族もこの地に移動することになります。二〇一七年四月時点のダラス補習授業校の子ども数(幼稚園部、高等部を含む)は四七九名でした。しかし二学期が始まった八月十九日時点で五〇〇名に達したということです。同社や関連企業の移転がこれから本格化するということ、さらなる子どもの増加が予想されていて、子どもの多様化がいつそう進むということです。

ダラス補習授業校が掲げている目的は「ダラス周辺に住む日本人の子どもが、将来日本に帰国し、日本の教育に移行する際に学習上の障害を少なくすること」「日本語を継承言語とする子供達で、日本語力の維持向上を希望する子供達に、より適切な日本語の学習機会を提供すること」の二つで、これらは子どもの多様化に対応したものになっています。

今回、校長の村上先生にコーディネーターいただき、授業参観のほか先生方や運営委員会の皆様と協議させ

ていただきました。こうした場から学校の特徴や課題が見えてきました。

### 全校挙げての取り組み

今回の訪問でまず感心したのが、子どもの実態に即した授業づくりを全校挙げて試みようとしていることです。全校共通の研究テーマ「グローバル環境の中で、個のニーズに応じた学力を身につけ、国際人として成長しようとする児童生徒の育成」を設定し、幼稚園部、小学部下学年部(小一〜三年生)、小学部上学年部(小四〜六年生)、中等部、そして国際部で研究を行っています。週一回の補習授業校ですから日本国内の学校とは異なりますが、時間のないなかで研究授業を行い、それをもとに研修を深める取り組みを行っているという点は注目に値すると思います。

### 【幼稚園部】

幼稚園部では、子どもの多様化が進んでいます。園児数の増加と共に、園生活を送るうえで日本語力が十分でない子どもが増え、入園後の指導に困難を来すようになったということです。このため入園テストを行っています。研究テーマは「幼稚園部の園児が皆の前で発表する経験を通して、自分の考えをしっかりと伝える力を身につけることができるように

指導する」ということです。具体的には、自分が大切にしているものや、家族の写真一枚などをもとに皆の前で発表するといった取り組みです。家庭や現地校の学習のhow and whyとの連続性もあり、子どもの日本語力を伸ばすうえで効果的な試みといえます。

### 【小学部】

小学部下学年の研究テーマは「異学年との交流を通して話す・聞く力を高める指導の工夫」です。具体的な取り組みとしては、二年生がおもちゃのつくり方を一年生に説明し、一年生がかならずおもちゃをつくることができるようにするという実践があります。これは、家庭での日本語のコミュニケーションが限定的であり、きちんと話さなくても理解してもらえない状況にあり、相手にきちんとわかるように伝える取り組みが必要だという背景があります。ことばの力をつけるうえでたいへん重要な実践といえます。

小学部上学年の研究テーマは「書く力の育成」です。上学年になれば国語力の差も大きくなってきます。たとえば国語の物語文では、子どもによっては語彙力や理解力不足もあり、その面白さがわからないという問題を抱えているということです。

上学年では、「クラス作り、仲間作り」に主眼を置いていて、授業の多くで意見交換を行っているということでした。授業参観をした小学六年生のクラスでは意見文を書く授業でしたが、ある女兒の「戦争のない平和な未来」という意見文は内容も素晴らしい、清書した文も丁寧に書かれました。このほか社会科については、日本の背景知識がないため学習が難しいという問題もあるということでした。

### 【中等部】

中等部の研究のテーマは、「習熟度と到達目標の差のある生徒たちへの指導工夫と実践」です。中等部となると、やはり日本語力の程度と進路によって、授業の焦点の当て方が異なってきます。中学部については、日本語力に差がある生徒が一緒に授業を受けているため、指導の難しさに直面しています。習熟度別の指導をどのように行っていくかが課題になっていきます。また、少ない授業日数のために教科書の内容の精選も課題です。今年度から学年を超えて研修会や研究授業を実施して情報を交換できるように、今後は自分の担当教科にその成果をどう活かしていくかが課題だということです。高等部は科目選択制をとっています。

す。数学、国語があり、それぞれ「基礎」と「発展」のクラスがあります。「発展」は「基礎」を二年間履修しないと受講できないことになっています。このほか、「表現基礎」と「メディア時事」という科目もありますが、「メディア時事」については表現基礎を履修し、かつ新聞記事が読める国語力が必要ということです。大きくいえば、「基礎」は永住者向け、「発展」は日本に帰国し受験に対応するコースといえます。進路により科目選択制を導入しているのが特徴といえます。

### 【国際部】

国際部は、一九九〇年十月に発足し、すでに三十年近い歴史を持っています。研究主任でもあるウッドワード先生がこの国際学級を牽引してきました。国際部とは、「国語学習の基礎となる日本語がまだ育っていない」子どもが対象です。具体的には①日本への帰国予定はほばない、②日本語が第二、第三言語である、③日本語環境はあるが、継承語としての日本語取得のためには十分でない、④友達や大人との簡単な日本語の会話はできるがスムーズに会話をすることは難しい、⑤電話での日本語会話は難しい、⑥日本語のTVや映画を楽しめるが内容をすべて理解するのは難しい、といった子どもを

対象にしています。現在、国際Ⅰ(小学部四年学齢相当まで在籍可能)、三年間を上限)、国際Ⅱ(小学部六年学齢相当まで在籍可能)、国際Ⅲ(中学部三年学齢相当まで在籍可能)、国際Ⅳ(高等部三年まで在籍可能)の四つのクラスがあります。各クラスの日本語力の判定基準、「継承語」としての日本語学習のカリキュラム、そして教科書や地理歴史など簡単な日本語でわかる視聴覚教材の作成などが課題になっています。

### 【JSLの取り組み】

ダラス補習授業校の特徴と課題についても一つ一つでも紹介したい取り組みがあります。同校の運営母体は日本人会の教育部会ですが、その教育部会は地域の住民を対象に「JSL」(Japanese as a Second Language)と呼ぶ日本語教育を行っています。レベルから六まであり、一年間で全四十時間の有料のコースで、補習授業校の開催日に合わせて授業が行われています。地域住民に対する日本語教育という試みもまたたいへん興味深いものがあります。

### 教育上の課題とその支援

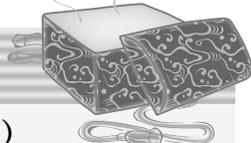
ダラス補習授業校では、全校挙げて日本語力向上の取り組みを行っています。しかし学校による調査では、

個別指導で対応しないと十分についていけない子どもが各クラスに三〜四人程度いるということです。その大きな要因として「日本語の習得および読解力がない」などの日本語力不足を挙げています。そこでAG5プロジェクトでは同校と共同して、言語力、思考力のもとになる日本語力の向上を目指した補習授業校のプログラム等を開発し、それを実践していただきたいと考えています。具体的には、国語の支援、日本語力の向上をねらった教科横断型のカリキュラム等の開発を行います。また国語の教材についての背景知識や体験の不足のほか、社会科では子どもが具体的にイメージをしにくいといった課題も指摘されました。これらの課題にこたえるために、デジタル教科書等を活用した単元開発を行い、その教材と効果的な指導法の開発なども行っていきたいと思っています。こうした教材等を実際に使っていたら、成果を検証していきます。このほか、近隣の補習授業校間での共同の実践や教員同士の交流の場などもつくれないかという提案をさせていただきました。

今回の訪問は実り多いものになりました。これからのAG5の取り組みの進捗や成果については本欄でお伝えしていきます。

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろいろなものが見えてきた……



## アメリカの補習授業校 インタビュー調査報告(1)

AG5委員 首都大学東京 国際センター准教授 岡村 郁子

AG5ではダラス補習授業校にご協力いただき、カリキュラムや教員研修プログラムの開発を進めることになっています。並行して、アメリカの補習授業校の現状把握とニーズ調査のために当地の6つの補習授業校を巡り、校長・副校長、運営委員、保護者や生徒の皆様インタビューを行いました。ご協力を快諾いただいた学校のうち、ワシントン、コロンバス(OH)、クリーブランドの各補習授業校を渋谷真樹委員と訪問して参りましたので、報告いたします。

### ワシントン日本語学校 (ワシントン補習授業校)

当校は一九五八年に創立された、世界でもっとも歴史ある補習授業校です。幼児部から高等部まで七〇七名が学ぶ大規模校で、二〇〇五年には日本語を継承語として学ぶ継承語学校と分かれたために在籍者数が四〇八名に減少しましたが、二〇〇五年以降は増加の一途をたどっています。ワシントンD・Cという大都市には塾もありますが、なぜ補習授業校が選ばれ続けるのでしょうか?

その理由の一つが、日本の代表としてコミュニティの行事に参加するという、補習授業校ならではの経験だと考えます。毎年四月初の土曜日に開催される「さくら祭り」。佐藤良明校長先生は、今年度から中学三年と高校生を全員参加とし、翌日曜日を振替授業日としました。前年度から準備を開始し、展示や日本の伝統的な遊びの紹介などの活動を行います。ほかにも正月の新春祭りへの参加など、児童生徒に日本人コミュニティの一員であることを自覚させ、日本文化に誇りを持たせることを目指しています。

今年度のもう一つの改革に、授業時程の変更があります。これまで午前二時限、午後四時限であった授業

時程を保護者に説明会やアンケートを通して理解いただき、午前四時限、午後二時限に変更しました。この変更により放課後にサッカークラブを発足させ、域内の他国(仏・独・亜)の補習校とのリーグ戦も予定されています。ほかにも琉球太鼓、百人一首、チアダンスなどの活動があり、教室を貸すことでフアンドレイジングにもつながっています。

授業では、漢字の数が一気に増える国語科の「三年生の壁」を乗り越えるために、二〇一四年度より小学三年から五年まで、国語科にコース制を導入しました。Aコースは学習言語としての日本語が不十分な子どもたちが、ゆつくり学ぶコースです。担当の中村慶子先生に、手づくりのワークシートやゲーム感覚で学べる教材を見せてもらいました。Aコースに入っても家庭でのサポートはよりしつかり行い、差が広がらないようにフオローが必要とのことですが、モデルとなり得る取り組み事例だと思えます。理科学習では、理科の専任が平日に事務局で準備し、授業日に担任教師とともに観察・実験等を実施。また高等部の卒業生がクラスのアシスタントに入るシステムも人気があります。これは大学のサービ

語力の保持にもつながっています。ワシントンでは保護者をはじめとする豊富な人的資源を活かしたイベントも積極的に行われています。たとえば日系の大手航空会社のパイロットによる講演会やスミソニアン博物館での特別授業、ナショナルオーケストラの団員による演奏会など、枚挙にいとまがありません。また、図書室は借用校の二階建ての建物をまるごと使った魅力的な空間で、一万五〇〇冊の蔵書を誇ります。このほかにも電子黒板などすべての教材の使用を許されているという借用校との関係の良さも、教育環境の整備につながっていると感じました。

### コロンバス(OH)日本語補習校 (コロンバス(OH)補習授業校)

オハイオ州には五つの補習授業校による「オハイオ州補習校教育改革連絡会」があり、相互に情報共有をしながらより良い補習校づくりを目指しています。当校は、児童生徒数がその中で最大の約五五〇人(全米でも九番目の規模)、「共に学ぶ心」を教育理念とする幼稚部から高等部までの「保護者立」の学校です。

保護者から立候補または推薦された理事十六名と派遣教員二名の計十八名で構成される理事会はいわば教

育委員会のような組織で、学校の管理・運営、教員採用、教育方針の設定、評価（自己評価）等を担っています。これらのノウハウのすべてが「教員用ハンドブック」に掲載され、誰もがすぐに授業ができる状態になっていることに驚きました。授業時間が少ない状況では、詰め込みではなく指導の密度を上げる必要がありますが、教員と理事会の協働により、現在デジタル教科書などICTの活用に取り組み始めているそうです。

さらに当校の大きな魅力の一つに、泊りがけの修学旅行があります。引率も保護者が協力する等、すべての運営に保護者の力が欠かせません。一方、教員研修の試みとして特筆すべきなのは現地校に向いての教員研修です。優れた実践を行っている現地校の先生の授業に生徒として参加し、自尊感情を大切にする指導や対話的で主体的な授業等を体験しています。また代講教員を手配することで、担任を持つ教員でも補習授業校内の授業を相互に見学する機会があるとのことでした。

オープンハウスには子どもたちが通う現地校の先生方を招待し、書初めなどを披露します。藤井良一校長先生によると、中学生対象のアンケートでは補習授業校生も現地校生も

約八割が楽しいと答えており、こうした交流が奏功しているようです。

ほぼ九割の児童生徒が帰国するものの滞在が長期になる場合が多いため、クラス内の日本語力には差が大きく、ここでも家庭でのサポートが必須とお話がありました。また、当地には地方に帰国する方も多く、編入学への不安の声（受け入れ校が限られている等）も聞かれました。

### クリーブランド日本語補習校 (クリーブランド補習授業校)

当校は日本からの派遣教員がいない小規模校で児童生徒数は八十七名。二〇〇三年から校長を務める斉藤美子先生をはじめ、教員の多くが在校生や卒業生の保護者で、熱意を持ち一丸となって教育に当たられています。そもそも補習授業校は赴任家族が自らの子どもたちの日本語学習のために設置した手づくりの学校だったことを彷彿とさせます。

駐在員家庭の子どもが七割を占めますが、うち長期滞在者が四割、帰国予定者が三割程度とのことでした。常駐の事務局がなく、一年交代の運営委員会が文字通り学校運営の要となっっています。

授業も見学させていただきました。幼児部では秋の風物詩・お月見のテ

ーマ学習です。お父さんやお母さんといっしょにつくったお月見モビールを手に浴衣や基平姿で記念撮影をした後は、保護者お手製の美味しいお団子に大歓声！小学四年のクラスでは自作のポスターを示しながら発表し、それを子どもたち自身が撮影、それを見ながら目標通りにできたか感想を言い合います。小学五・

六年は合同で十一月の学習発表会の練習中。小学部は低学年では十名程度ですが、高学年から中等部では少人数で、丸テーブルを囲んで授業をしているクラスもありました。

当校の特徴の一つに「国際部」があります。日本語に興味のある人を対象に、「国際部Ⅰ」では日本語テキストを使って初歩を学習、「国際部Ⅱ」では日本に住んだ経験のある人や学校で日本語を勉強した人が集まって中学校の教科書で学び、補習授業校の地域貢献に一役買っています。熱心な読書指導も特徴の一つです。

蔵書数は四〇〇冊に上り、毎年夏休みの宿題として全員が読書感想文を書きます。二〇一四年には青少年読書感想文全国コンクールで学校賞を受賞しました。永住家庭の子どもも多いですが、校長が日本語力を厳しく見極め、宿題の確認をはじめ保護者のサポートを入学前に誓約さ

せる姿勢が、教育レベルを保つうえで大いに役立っているようです。

訪問を通して、いくつかの共通する課題が見えてきました。一つは「全教員が使いやすい教材教具の提供」。補習授業校の先生は平日に仕事を持っている方も多く、授業準備を短時間で効率的に行う必要があります。

手づくりされているルビつきの教材やワークシート等は汎用性の高いものを提供できればと感じました。また社会科で扱うトピックは海外ではイメージしにくいことが多く、豊富な資料をハンディに扱えるデジタル教科書などが有効でしょう。二つ目は「無理なく授業を進めるための年間計画や指導案の開発」。限られた時間で学ぶ児童生徒のニーズに合わせたメリハリのある指導用マニュアル、指導案集の提供が求められています。三つ目は「教員研修のプログラム開発」。どの学校でも教員研修を工夫して実施されていますが、特に初任者用マニュアルや映像資料のようなものへの要望が多くありました。

以上、今回訪問させていただいた学校の現状はそれぞれ特色がありますが、さまざまなニーズにお応えできるように、AG5プロジェクトを強力に推進して参りたいと思います。

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろいろなものが見えてきた……

## アメリカの補習授業校 インタビュー調査報告(2)

文部科学省国際教育課外国人児童生徒等教育支援プロジェクトオフィサー 近田 由紀子

AG5ではアメリカの補習授業校の現状把握とニーズ調査のために当地の6つの補習授業校を巡り、校長・副校長、運営委員、保護者や生徒の皆様インタビューを行いました。11月号に引き続き、アメリカの補習授業校訪問調査から、オースチン・セントルイス・ロサンゼルス各校の概要・特色ある取り組み・これからの補習授業校への期待について、ご紹介します。



### オースチン補習授業校 (オースチン日本語補習授業校)

テキサス州にある当校は、二〇〇〇年に設立され、在籍者は幼稚部を含めて二二〇名を超えます。運営委員は、全員保護者で、無償で務めています。各教室や廊下、図書コーナー等には、保護者や、高校生、卒業生のボランティアの姿があり、一丸となって子どもを育てています。

#### ① 特色ある取り組み

**コミュニケーションを促す指導体制**  
始業前の算数指導(希望者)では国語とは別の教員が担当します。例えば四年生の先生が算数では一年生を教えます。複数の教員で指導するため、子どもに対する悩みや指導について、教員間のコミュニケーションが活発になります。

また、データベース内の指導記録を共有できるようにしたこと、指導のヒントを得られて不安が軽減されたそうです。放課後、近い学年同士で相談し合える雰囲気もでき、より働きやすくなったといえます。**専門性を生かした幼稚部システムの確立** 日本の幼稚園教諭経験者を採用して、その優れた専門性を生かして幼稚部のシステムづくりを手掛けてきました。例えば、二クラス合同

の朝の会では、朝の挨拶から集団活動を通して社会性を育てています。講師の指示が適切なので、子どもたちは非常に落ち着いていました。早くから文字指導にも取り組んでいます。保護者ボランティアによる放課後九クラブ、小二・三年生を対象に九月〜十二月、保護者ボランティアが先生役となり、子どもたちの九九の暗唱を確認しています。合格した子どもには立派なトロフィーを授与。意欲が増し、九九の定着も進んでいます。

#### ② これからの補習授業校への期待

**キャリアを拓く身近なロールモデル**  
子どもの将来の選択肢を広げること、子どもが補習授業校で学ぶモチベーションを高めるために、ロールモデルの活用が望まれます。保護者の中には、自身も海外子女で、トリリンガルとして成長したことがジョブセキュリティ(雇用を守る知識・手法等)になったという経験をもつ方もいます。

**新しいカリキュラム**「帰国予定か永住予定かを問わず、モチベーションが上がる新カリキュラムと、そのガイドとなるものが欲しい」という校長の言葉には強い願いと期待が込められていました。教員や保護者からは「国語に日本のよさを伝える社

会科の要素を入れることが、メリットになる」「体験的な活動による学習も取り入れたい」「子ども自身ができることとできないところを分かっていることが重要」等、示唆に富む考えが伝えられました。

### セントルイス補習授業校 (セントルイス日本語教室)

ミズーリ州にある当校は、今年四十周年を迎えました。幼稚部・国際部を含めて約一七〇名が在籍しています。保護者から選出された運営委員長、運営委員らによって月一回委員会が開催され、運営上の課題やイベントの企画等も協議されています。また、日本祭への参加・新年会の開催等により、地域に日本文化を発信したり地元の方々とのつながりを深めたりする拠点となっています。これらは、六割を占める永住予定の方々が牽引し、保護者の積極的なボランティア活動により支えられています。

#### ① 特色ある取り組み

**黒字に変えた補習授業校の経営** 現地の高校生や大人を対象とした国際クラスと幼稚部年少クラスの設立により経営が黒字になりました。国際クラスは、日本語のレベルごとに編成され、一単位時間のみの授業です。

国際結婚した保護者の受講も多く、中には日系企業へ就職した例もあるそうです。幼稚部年少クラスのニーズは年々高まり、五年前に設立されました。年少・年中・年長合わせて三十七名の園児が在籍しています。

現地採用講師研修会のホスト 教員の質の向上と研修のために、毎年、持ち回りで行われる現地採用講師研修会が今年はセントルイスで開催され、小・中学部の全教員が参加しました。他校の教員との交流や情報交換も活発に行われ、研修のよさを実感した教員たちからは更なる研修の機会を望む声が上がったそうです。

**個人差への対応** 日本語力で学習が制限されず、子どもたちの多様性に満ちたアイデアや知恵を引き出せるように、1Tの活用や、日本語の取り出し指導(希望者)ができる体制を整えています。中学部担当の先生は、宿題にポップ・ステップ・ジャンプの段階とポイント制を導入。生徒は自分に合ったレベルやポイントを考えて選ぶなど、自己管理しながら達成感をもつことができるので、学習意欲も高まっているそうです。

**②これからの補習授業校への期待**  
人をつなぎサポートするシステム  
指導方法、教材、運営方法等、様々なリソースを活用できるポータルサ

イトの設立が望まれます。研修や交流に関しても遠隔システムを活用して学び続けたいとの願いがあります。

運営委員長は、当校出身者が例えばMissouri Universityに積極的に受け入れられ、日系企業でインターンシップのチャンスをもつようなつながりができるとよいと話していました。

**幼稚部への支援** 幼稚部のニーズは増えているものの、現在支援対象でないため、図書(絵本・紙芝居)・視聴覚教材(ビデオ・DVD)・教具(楽器・おもちゃ等)が不足しており、リソースの充実が望まれます。

### ロサンゼルス補習授業校 (あさひ学園)

カリフォルニア州にある当校は地域に四つのキャンパスをもち幼稚部から高等部までである大規模校で、二〇一九年、五十周年を迎えます。理事長や理事は、南カリフォルニア日系企業協会より選出されます。校長は文部科学省派遣三年目、事務局長は教職も含め三十年、副校長も教職を含め八年勤務と、ベテランが基軸を担い、伝統と実績を生かしつつ多様なニーズに応えられる教育の実現を目指しています。五十周年記念行事に向けて、HPには卒業生の体験談や様々な情報が発信されています。

### ① 特色ある取り組み

違いを認めた上での「学び合い」へ これまでに、日本語力の差が広がっていく子どもたちへの適切な指導を目指して、習熟度別のシステムを様々な方法で試してみたものの、いづれも期待する成果よりも差別感を生むことになり、なかなか上手くいかなかったそうです。日本語力が違っていても共に学んで力を高める方法を考えることが最善と、日本語力のクラス分けをやめました。互いの違いを認めた上で一緒に「学び合う」という形態は「あさひ学園二〇一七年ビジネスプラン」でも経営可能と判断されました。

### 「学び合い」へ向かう教員研修

毎月一回三十分間の教員研修で、「学び合い」もテーマにしてみました。経験の少ない教員にも分かるように、教員のやる気を刺激することを大切に、「分からないことがあった時に隣の人に声をかけをすることから始めること」、「多様性に富む補習授業校での学び合いは、子ども同士だけでなく教員も含めて意義があること」を伝えました。「予測困難な社会だからこそ、多様な子どもたちのコミュニケーションを通して課題を解決していく『学び合い』が大切であり、そこに塾との違いがある」とい

う校長のメッセージが印象的でした。アイデンティティを支える中・高等部 補習授業校に通学する目的が分からなくなったりアイデンティティクライシス(自己喪失)に直面したりする生徒たちがいますが、卒業文集や卒業生便り(HP掲載)から彼らが迷いを通り越していくことが読み取れるそうです。とりわけ中学部から高等部に進級する時期に、生徒の内面に「化学反応」が起こり、日米どちらの大学に進むか等、選択肢を広げていっているようです。ある保護者は、多感な時期にこそ補習授業校があつてよかったと振り返っていました。

### ② これからの補習授業校への期待

補習授業校の新たな役割 補習授業校は現地校とも日本の学校とも違う特殊な世界。挨拶などの生活様式や日本の学校文化を教えることへの期待と共に、いろいろな学ばせ方があつてよいのではないかとという提案がありました。例えば、日本とICTでつなぎ討論会を行えば、多様な考え方に気づき、日本の子どもたちにもメリットになるといいます。

このようによりよい教育を願う皆様と共に、AG5はチャレンジしていきます。次号もお楽しみに！

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……

## 補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発



海外子女教育振興財団 教育相談員(元啓明学園初等学校、中学校高等学校校長) 佐々 信行

AG5の研究テーマ4は「補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発」です。このテーマでは、ダラス補習授業校(アメリカ)に「研究提携校」になっていただき、いっしょに研究を進めることになっています。11月にプロジェクトチームのメンバーがダラスを訪問し、具体的な活動が始まりました。現在までの取り組み状況について報告させていただきます。

### 日本人学校・補習授業校への期待

AG5プロジェクトの三つの課題は、第一に「海外に在住する子どもたちに高度なグローバル人材としての基礎力を育成すること」、第二に「日本人学校・補習授業校における日本語教育を向上させるための総合的な取り組みをすること」、第三に「在外教育施設が日本文化の発信の拠点としての役割を果たせるようにすること」です。

このなかで第一、第二の課題に関しては、帰国して日本の学校に戻る児童生徒に必要な日本語の力をつけると同時に、帰国する前提でない子どもたちの日本語の力もそれぞれにしっかりと伸ばしていくということを目指さなければなりません。それが可能なら、在外教育施設が日本文化の発信拠点として力を発揮することにもつながるでしょう。

関係者のかたがたは「そんなことはずっと前からわかっている」と言われるでしょう。しかし、文部科学省の事業として正面から取り組むところまでできたことは、やはり画期的だと思います。

### 補習授業校のプログラム

テーマ4を担当するチームのメン

バーは、いろいろな立場で補習授業校や日本語教育にかかわっています。専門分野は、補習授業校教育、日本語教育、英語教育、異文化間教育、教育社会学などですが、多くは複数の分野での経験を持っている人たちです。

チームではまず、それぞれの経験を踏まえ、どのようなプログラムが有効なのかを話し合って基本的な考えをまとめました。

①プログラムの基本的なイメージ  
いろいろなレベルの日本語能力の児童生徒が共に学び、それぞれに力を伸ばすことができることを基本コンセプトとする。

②期待できる効果  
・日本語能力の向上  
・子どもたちの日本語学習への意欲・満足度の向上  
・補習授業校からの脱落者の減少  
・保護者の満足度の向上

・教員の負担軽減  
③目的達成のために必要なこと  
・講義型・知識伝達型ではなく児童生徒の活動を重視する学習形態とする。

・児童生徒の言語の発達段階を踏まえる。  
・知的な発達段階にふさわしい内容を扱う。

・教科学習を通して日本語能力を向上させていく。  
・教員に大きな負担を負わせない教材を開発する。ICTの活用も考える。

立場の違うメンバーが集まっても、プログラムの中身および作成方法について大きな意見の隔たりはありませんでした。おそらく補習授業校関係者の多くのかたがたにも共感していただける内容だろうと思います。

そして、この考えをもとに、ダラス補習授業校と実際の授業を組み立てる作業を始めることになりました。

### プロジェクトチーム、ダラス補習授業校を訪問

十一月上旬、プロジェクトチームのメンバーがダラス補習授業校を訪問しました。

実際に教室を訪問してみると、子どもたちが主体的に活動する授業がたくさん展開されていました。子どもたちの実態を踏まえて考えれば、必然的に活動を重視する学習形態が中心になるのだと感じました。多様な児童生徒に対しては、講義型の一斉授業では間に合いません。

国内の学校では子どもたちの力の違いが補習授業校ほど大きくないので、先生が一方的に講義するような



ダラス補習授業校に訪問した際に行われた教員の研修会

昔ながらの授業でもなんとか成り立ってしまいます。新しい時代に合った授業の必要性が叫ばれながらも学校がなかなか変化しているように見えないのはここに原因の一つがあるように思われます。そのため、補習授業校からの発信は、国内で教えている先生がたがよりよい授業をつくっていくために貢献する可能性も十分に持っているといえるでしょう。

今回の訪問では、次のようなことを共有し、デジタル教科書のデモンストレーションも行いました。

・補習授業校の児童生徒は、対人関係力、自己表現力、外国語能力など「グローバルな能力」を育てるために恵まれた状況にある。それ

は帰国生の調査等によっても確かめられている。

・日本語能力が異なる児童生徒が共に学び、それぞれ力を伸ばすには「アクティブラーニング」が有効である。具体的な指導法として、ジグソー法(\*)などがある。

・日本国内での外国人児童の指導で、「教科と日本語の統合学習」が効果を上げている。

### 最初の授業実践

今年度はまず、小学四年生を対象に、一つの単元を設定して計画をつくり、十二月から一月にかけて実施することになりました。最初に四年生を選んだのは、発達段階から考えて授業の工夫による効果が上げやすいと考えたからです。

英語で母語を確立した児童であれば、日本語の力が弱くても、たとえば英語で調べたことを日本語で発表するなどして、日本語が強い児童といっしょに学習活動を行うことが可能です。

各学年の先生がたからは、目の前の子どもたちの力を少しでも伸ばしたいという切実な訴えがありました。が、ことを意図的に学ぶ段階に達していない幼児の場合は授業の工夫だけで効果を上げることは難しいと

思われます。一方、上の学年になると学習内容のレベルが上がり、ハードルが高くなります。取りかかりやすいところから始めて、そこから対象を広げていくのが現実的ではないかと考えました。

単元名は「発見！ わたしたちのテキサス、わたしたちの都道府県」に決まりました。十二月の第一章では、テキサス州について調べたことを伝える学習活動を行います。一月の第二章は国語の報告文を書く単元と連動させて、「自分とかわりのある地域の特色やよさを伝えよう」という課題で学習を組み立てます。

この学習は国語科として扱うことも可能です。その結果を関係者間で共有し、よりよい内容にする検討を進めます。

### 補習授業校のネットワーク

これから、ダラス補習授業校とプロジェクトチームとでさらに学習指導計画を作成するなどの作業をしていきますが、すでに各地の補習授業校には、日本語の能力向上のための知恵やアイデア、そして経験が種々あると思います。我々としてはより多くの補習授業校にご協力いただければ、より大きな成果を上げることができると考えています。

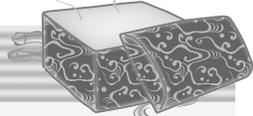
世界各地の補習授業校で、ダラス補習授業校と同様の活動を一部でも試行していただく、別の角度からご意見をいただく、すでに行っている学習の情報をお知らせいただくなどのご協力がいただけると助かります。ぜひ、よろしくお願い申し上げます。

ある先生は、「いま同じことを教えている先生と話がしたい」とおっしゃっていました。あまり大きくない補習授業校では、同じ学年のある教科を担当する先生がひとりしかないという場合が珍しくありません。まったく経験のない内容を教えなければならぬこともあります。補習授業校同士で効果のある指導法を交換し合えれば、もっと効率のよい授業準備ができ、子どもたちが楽しく日本語を学ぶ環境に向かって前進するでしょう。

AG5プロジェクトではICTを活用したネットワークづくりにも取り組んでいきます。補習授業校の関係者の皆さん、補習授業校としてご協力いただける場合は、ぜひプロジェクトチーム(somu@joss.or.jp)までご連絡ください。

\*ジグソー法 協同学習を効果的に進める手法として「知識構成型ジグソー法」が注目されている。学習者が主体的に活動するように構成されたステップが特徴。

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ



トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……

## 2年目のグローバルクラスの現状報告 ～グローバルスタディーズを中心に～

香港日本人学校小学部香港校 校長 樗木 昭寿



平成28年度から4年生に1クラス開設したグローバルクラス（以下GC）は今年度、4,5年生の2学年体制となりました。担任のほかイメージン教科を担当するNative教員を増員し、5名体制で指導に当たっています。児童は現在4年生15名、5年生17名が在籍。すでに来年度の募集・選考も終わり、来春20名の4年生が入学する見通しとなりました。本校のGC教育の取り組みが少しずつ広まり、日本や他の日本人学校からの志願者も増えてきています。

### 【GC教育の特色】

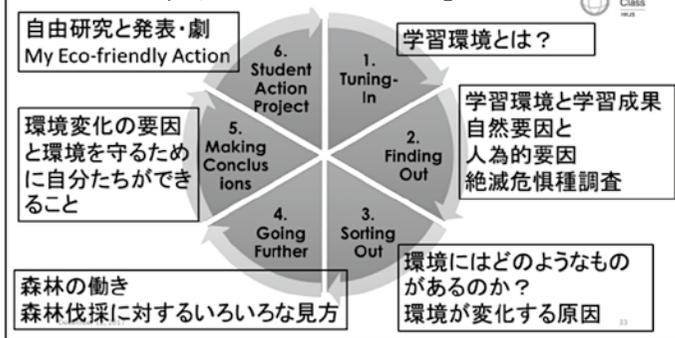
GC教育の特色は、①グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を身に付けるための英語イメージン教科（算数、理科、英語）やバイリンガル教科（社会、家庭科、グローバルスタディーズ（以下GS））があること、②調査力、分析力、プレゼンテーション力、課題解決力などこれからの社会に必要なグローバルスキルを培うための新教科「GS」を設けていること、そして③日本人としての意識を持ちながら、グローバル市民としての主体性を育むためのSAP活動（スチューデントアクションプロジェクト）があることです。

### 【GSの内容と成果】

中でもGSは、国際バカロレアのUnit of inquiryを参考にした探究型サイクルの学習過程で、世界的な課題について学期に一つのテーマで学習を進めています。

四年生は昨年度の実践を基にしたカリキュラムで「多様性」や「水」の問題について、五年生は「環境と持続可能な社会」や「イノベーションテクノロジーとその影響」について新しくカリキュラム開発をしながら

### GC5年生「環境と持続可能な社会」学習過程



イメージン理科の授業の様子



それぞれの立場に立って英語で議論する5年生の児童

学習を進めています。

GSでは、課題について考えるときにIBのキーコンセプトでもある多様な見方でApproachesを重視しています。森林を伐採するか否かの議論では、はじめは反対の考えを持っていた児童も、林業や農業従事者や村の役場等様々な立場に立つての議論をさせることで、多面的に物事を考えるようになり、考えを深めることができるようになりました。

またGSの目的は、身の回りの事象から国際的な問題に関心を持たせることを通して自分で何かActionsを起こすことにあります。そのため、学習の最後にはSAP活動として劇や研究発表、絵本作りなどを行っています。そうすることで自分が学ん



世界中の子供達に教育を！ マララさんのスピーチで一般クラスの4年生とGC5年生の児童に訴えるGC4年生の児童

だことをクラス外にもオープンにし、これからも関心を持って実践を続けていく動機付けにしているのです。

五年生の児童が障害のある人に関する新聞記事を切り抜いてきて、一年前にGSで学習した「多様性」の学びを生かして意見文を書いてきました。また、家庭での節水がなかなかできなかった四年生の児童がカレー作りの調理実習でどのくらいの水を使うのか実際に計測して多くの水を使うことを実感することにより、家庭での無駄な水の使い方に気づき、それ以降、節水を継続するようになりました。これらの事例は、まさにGSの学習の成果であると思います。そしてGSは、社会科や国語科など他教科との横断型の教科でもあります。五年生は国語科「明日をつく

るわたしたち」の学習で、これからの機器の整備や学校生活の改善について、GSで培った調査力や分析力を活かして説得力のある提案書を作成しました。来年度の中学部との校舎統合に伴う遊び場の問題や、パソコン整備の要望など一学期に取り組んだ環境の学習や、二学期のテクノロジーの学習が活かされていました。

五年生の児童の保護者からは次のような感想をいただきました。

「一学期間、同じトピックを様々な角度から取り組んだのは初めてでした。課題がフィールドワークと連動し、本人オリジナルの成果物として実を結ぶことにやりがいを感じているようです」

学期に一つのテーマで調査・探究活動を行い、最後は何らかのAction



水の蒸留について英語で実験の支援をする大澤由恵教諭

を起こす六段階の学習過程も定着しはじめ、地球市民としての主体性が育ってきています。

### 「GCこれから」

本校のGC教育は、国際コミュニケーションができる英語力の育成を目指しているではありません。「習得した英語で何ができるのか」というむしろコミュニケーションの内容を重視したスキルを確かに身に付け、これからのグローバル社会をリードしていける人材の育成にあります。

今年度六月に、文部科学省の「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）」の研究提携校として「高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム」の開発に取り組むことになりました。

具体的には、GCでの①GSのカリキュラム開発、②英語イマージョン教科学習のカリキュラム及び指導法の開発、更には③レギュラークラスでの英語教育の強化です。これまでのGCの取り組みを継続発展させながらも、ICTを活用した新たな英語教育にも全校で取り組んでいきます。

今後、本校のGCで開発してきたカリキュラムが本校全体で、更には

他の学校でも実践でき、真のグローバル人材の育成ができる日もそう遠い未来の話ではないと思っています。

三学期には、IBの理念に基づいたカリキュラムを研究している東京学芸大学附属大泉小学校、英語イマージョン教育を行っている東京学芸大学附属国際中等教育学校やぐんま国際アカデミー初等部の視察研修を予定しています。先進校の取り組みから新たな可能性に気づき、「グローバル社会をたくましく生きぬくための確かな学力と豊かな心を持った児童の育成」を目指して、香港というグローバルシティーにある利点を活かしてチャレンジを続けていきます。今後とも皆様のご指導、ご支援をどうぞよろしく申し上げます。



校長室で5年生の児童から提案書を受け取る私

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## AG5プロジェクトにおけるアスンシオン日本人学校(パラグアイ)の取り組み

アスンシオン日本人学校 校長 田口 克敏



パラグアイは多くの日系人が生活する大の親日国です。今回、AG5プロジェクトの日本文化発信の拠点校としてその一翼を担うようになったことは、以前から「パラグアイ」の日本人学校として、「何ができるのか」を模索していた本校において、ある意味「幸運」な巡り合わせでした。「日本文化の発信拠点」としてできることが多く見出せる一方で、「受信」できる可能性もあるからです。ここでは、AG5プロジェクトの観点から、本校がこれまで何を、どのように取り組み、今後は何に向かっていこうとしているのかについて紹介します。

「味噌」「醤油」「豆腐」に「納豆」。これらは日本人にとって伝統的な食材であり、これらを活用した献立の立て方や調理法などは大切な「食文化」である。

パラグアイ共和国には、この「日本の食材や食文化」がしっかりと根づいていて、「日本の真裏にある『日本』」ともいえるほどである。

では、なぜこのような姿が実現しているのか。それは日本人移民が八十余年にわたり、自らの生活と共にこうした文化をパラグアイの地で「発信」し続けてきたからであろう。

アスンシオン日本人学校は、こうした先人が築いてきた信用と伝統が根づくパラグアイ社会のなかで、温かく見守られながら日々の教育活動に取り組んでいる。

### 一、「アスンシオン日本語学校」との 合同研修を通じた日系人教育 への支援と協働

パラグアイには日本人移住地を中心に九校の「日本語学校」があり、日系人子弟に日本語や日本文化を身につけさせている。

しかし近年は世代交代が進み、周辺国に比べれば高い日本語力を維持しているものの、各地の日本語学校の先生がたの奮闘にもかかわらず、

若い世代ほど「継承語としての日本語」の習得が厳しくなってきた。その理由としては、日本語を母語としない「パラグアイ人」を保護者のどちらかに持つケースが増え、家庭内の会話で日本語が使われず、日本語学校で学んだことを日々の生活の中で繰り返し復習する機会が乏しいなどの事情が挙げられる。

本校はAG5プロジェクトの話が持ち上がる以前から、「運動会」等の行事を通じて「アスンシオン日本語学校(以下「日本語学校」)と相互交流を重ねてきていたが、日本語学校の先生がたが「教授法」や「授業づくり」「授業研究」等について学ぶ機会はかならずしも十分につくれてはいなかった。

そこで二〇一六年後半より、日本語学校の課題解決に寄与する「合同研修」の企画を日本語学校の関ニルダ尚子校長との間で進めてきた。研修に際しては、事前に日本語学校側の「学びたいこと」や「困り感」などのニーズを探るようにした。

すると、日本語学校には特に「国語」指導に関する深刻な悩みがあり、課題解決の道筋を見出したいとの強い思いがあることがわかった。

具体的には、「保護者から『学年相応の漢字を身につけさせてほしい』

と言われても、限られた時間(平日三回の午後や土曜日の六時間余り)で、しかも学んだことを家庭で繰り返し練習することが期待できないなか、どのような漢字指導をすれば効果的か」「長時間の国語の授業をできるだけ飽きさせず、興味関心を喚起させる指導法を知りたい」等があった。それらを踏まえ、一七年七月に本校で合同研修を実施した。

当日は、通常の単元のなかに効果的な漢字の指導法を織り混ぜた授業を展開し、それをもとに研究協議を進めた。協議会では授業や漢字指導だけでなく、学習規律のつくり方、特別な支援を要すると考えられる子どもへの対応などに関する質問も出された。

事後アンケートでは、「参考度」「有意義度」等についてはほぼ一〇〇%の満足度を得られ、全員から次回も参加したいとの回答が寄せられた。自由記述でも「日本の教育を実施している先生がたの授業を見られて勉強になった」「国語教育以外(生活指導、作文指導、プロセス評価等)も学びたい」との声があり、合同研修が日ごろから感じている課題を解決する糸口になり得た様子がうかがえ、手ごたえを感じた。

また本校としても、自らの教育ス

キルが現地の教育関係者のために役立つと実感できたことは大きな収穫だった。

さらに一八年一月にはAG5プロジェクトの一環として、日本語学校の先生二名と、同じく当地で日本式教育を実践している日本パラグアイ学院の先生一名が訪日し、日本の学校や教育機関等において十日間の教育研修を積んだ。

それらの成果も踏まえ、二月に二度目の合同研修を実施。今回は本校の教員が日本語学校に出向き、年度初めの授業に参画する形で行った。

「年度当初の学級開きはどのようにすればよいのか」「学習の導入時における動機づけはどう指導すればよいのか」「学習規律や生活規律を年度初めに徹底したい」など、担任ごとに異なる課題意識に対し、ペアとなった本校の教員が事前に助言・協議して授業づくりを進めることにした。これにより、日本語学校の先生が「日本式教育」を学び、その指導スキル向上がはかられることを期待した。

一八年度の本校の「校内研究」は、その三分の一の時間を日本語学校との合同研修を踏まえたAG5プロジェクト関連として確保している。これにより一七年度以上に日本語学校に対して深く広く「日本式教育」を

浸透させ、日系子弟への日本語教育等に寄与したいと考えている。

## 二、「日本語学校との「共通教材」の開発」

本校はこれまでに、小学部社会科の副読本として『わたしたちのパラグアイ』を作成してきた（日本では、身近な地域の様子や歴史の学習などのための副読本づくりは、各自自治体を中心となりよく行われている）。

これを下敷きにして、今回のプロジェクトにおいて本校では『わたしたちのパラグアイ』の改訂版を、日本語学校ではパラグアイの日系子弟のための初めての副読本づくりを、双方で協議しながら進めている。共通した章立てを含み、使用する題材にも共通したものを設定し、「日本側の視点」と「パラグアイ側の視点」が対比されるような形で作成したいと考えている。また日本語学校に通う日系人子弟にとっては、自分たちの身近な生活について学ぶだけでなく、課題を設けて自らが調べてまとめたり、意見や考えを述べたりできるような構成を立てることで、国語学習のワークブックとしても活用できるようにする。

さらに日本語学校のもう一つの課題である「日本人移住」についての

学びの基礎が確実にできるよう、移住の歴史や人々の苦勞、パラグアイ社会に日系人が何をもちたらし、どのように貢献してきたのか等、子どもたちのアイデンティティ形成に資するような内容を組み込んでいきたい。

一方、本校としてはこれまでの『わたしたちのパラグアイ』をベースに、本プロジェクトを通して日本語学校との協議や資料検討を進めることで、従来の副読本にはなかった「パラグアイ側の視点」を織りませ、日本とパラグアイの友好関係や企業進出など新たな分野を盛り込む。日本語学校の協力を得て「日本人移住」をさらに掘り下げて学べる教材としても進化させていきたい。

## 三、「日本文化の発信」をどのように捉えるか

AG5のプロジェクト「日本文化発信の拠点形成」では、何をもち「日本文化」と捉えるかが問題だった。本校ではこれまで、「運動会」

や現地校と交流するなかでの「昔あそび」や「習字」、「浴衣の着つけ体験」等を通して日本文化を発信してきた。しかし「日本文化の発信拠点」とはたしてそういうことなのか、学校でなければできない「日本文化の発信」とは何なのかを突き詰めた結

果、世界でも浸透しつつある「授業研究」を含む「日本の教育文化」や「清掃活動」「規律」などの「学校文化」こそ、学校が積極的に発信すべき「日本文化」ではないかということにたどり着いた。

政府派遣教員は自校の教育活動に専心する一方で、自らが身につけている多様なスキルが、派遣国の教育においてもきわめて有効であることに気づかなければいけない。そして、機会を設けて積極的に現地社会に働きかけることにより、日本人学校の付加価値を高め、ひいては日本の「ファン」をその地域に増やすことにつながることを自覚していく必要があるのではないか。

在籍者数が少ないからその学校は不要、という発想はたんに「数」だけに注目するからである。日本人学校の中身に代えがたい価値が見出され、設置国からも必要とされる存在になれば、「拠点」として残れる可能性は高くなるだろう。

本校が将来にわたり、こうした「日本文化の発信」に取り組み続けられ、やがて「日本の食文化」がこの地に受け入れられ、いまや欠くことができなくなったように、この国の教育を大きく変えることにつながるものと考えているし、そう願いたい。

〒105-0002

東京都港区愛宕1-3-4 愛宕東洋ビル 6階

公益財団法人 海外子女教育振興財団

事業部 教育企画・教育相談チーム

TEL : 03-4330-1352

FAX : 03-4330-1355

E-mail : [ag5@joes.or.jp](mailto:ag5@joes.or.jp)

URL : <https://www.joes.or.jp>



海外子女教育専門誌

# 海外子女教育 4

2017.12.26

特集①  
海外赴任！  
子どもの学校はどうする？  
— 家族の決断 —

今月の巻頭  
和田哲大さん  
インタビュー

海外赴任先  
東京都市大学等々力中学校・高等学校

海外赴任先  
クアラルンプール日本人学校  
北馬心クワン外語国際学校  
水ノ丸幼稚園兼学校

【海外赴任先の子どもの学校生活】  
【海外赴任先の子どもの生活】

特集②  
読み聞かせの大切さ  
— 子どもの本棚に託す思い —

